



一人ひとりの「いのち」に 寄り添う。それが根本です。

健やかな毎日を送るために、行政にはいまでのような施策が
求められているのか。東北各県の行政トップに聞くシリーズ対談。

女優

紺野美沙子さん

青森県知事

三村申吾さん

紺野 健康に関して青森県が抱えている課題というのは、どういふものがあるのでしょうか。

三村 まず、青森が「短命県」であるということですね。本県の平均寿命は年々延びているものの、残念ながら、男性も女性も全国最下位という状況が続いている。というのも、40代、50代で亡くなる方が多いからなんです。生活習慣からくる脳卒中や心筋梗塞、がんですね。

紺野 生活習慣病は「サイレントキラー」と言われますから**三村** この短命の状態をどう改めていくか。そこでいま提唱しているのが「健やか力」です。

紺野 健やか力？

三村 「ヘルスリテラシー」とも呼んでいます。弘前大学の中路重之先生が提唱された「健康教養」という考え方が基になっているんですけど、要するに健康に関する知識を高め、活用する力のこと。その「健やか力」をみ

んなで高めよう、というものです。

紺野 まずは普段の健康づくりからということですね。

三村 青森県では「今を変えれば！未来は変わる!!」というスローガンを掲げているんです。

今の努力が必ず未来につながる。ですから健康づくりの普及啓発にも力を入れています。例えば、「だし」のうま味を活用して減塩を推進しようという「だし活」。そのCMが、吉本興業主催のCMコンテストでグランプリを取ったんですよ。私も保健師さん、保健協力員さん、食生活改善推進員の皆さんと一緒に「できるだしダンス」を踊るために、1年で20、30カ所まわりましたよ（笑）。

紺野 陣頭指揮ですね（笑）。

三村 私の仕事というのは、産業・雇用・経済で一人ひとりの「暮らし」を守り、保健・医療・福祉で、一人ひとりの「いのち」

を守ることだと思っています。

紺野 県民のみなさんそれぞれが、より健やかな人生を送れるようにしよう。

町長時代に考えた 「本場の豊かさ」とは

三村 そうです。私は平成4年35歳で百石町（現おいらせ町）の町長に当選したのがスタートなんです。どんな町づくりをしたらいいのか、町民の皆さんといろいろ話をしました。百石町の中学3年生全員と語り合う『15の春と語りた』というのもやっただんです。そこで、ある中学生が「百石町には住みたくな」と言うんですよ。「ここでは、じいちゃん、ばあちゃんを年をとって具合が悪くなると、すぐに他の町の病院や施設に入れられてしまう。それは納得がいけない」と。これはショックでしたね。

紺野 そうでしょうね。

三村 で、保健師さんと一緒に

お年寄りがいる家を訪問して回ったんです。「どうですか？」「いやあ、町長、わしは家で死にたい」と。家にいれば、孫も来てくれるし、子どもたちも来てくれる。家族に見守られながら、最後を迎えたい、と。そのとき考えさせられましたね。『本場の豊かさ』とはなんだろうって。地域社会の中で、ちゃんと働いて自分の人生を実現できる場所があつて、一定の年齢になったら安心して老後が送られて、最後は納得して死ぬことができる。そこそが「豊かさ」なんじゃないか、と。そこで百石町で、保健・医療・福祉のそれぞれのサービスが切れ目なく一体的に利用できる「保健・医療・福祉包括ケアシステム」を立ち上げたんです。

紺野 それが、いまでは青森全県での取り組みになったんですね。**三村** 知事になってからも同じ

療・福祉包括ケアシステム」の導入を働きかけ、県としてその基盤づくりを支援してきました。**紺野** 平成24年から、国も「地域包括ケアシステム」を進めています。それが、それとはまた違うんですか？

三村 国が進める「地域包括ケアシステム」は、制度としては主に高齢者を中心に包括的なサービスを提供しようというものです。本県の「保健・医療・福祉包括ケアシステム」は、全ての住民が対象であり、お腹の中の赤ちゃんから亡くなるまでの、すべてのライフステージでサービスを提供しようというのなんです。



久しぶりに家庭の味に出会えたよ。
と、おじいちゃんは言った。



地元の食材を、地元の人たちが調理し、味わう。

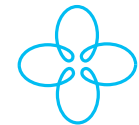
新郷村連合婦人会の人たちを厨房職員として雇用する「介護老人保健施設しんごう」。

朝日が村に広がる田畑を照らし、小鳥がさえずる頃、『介護老人保健施設しんごう』の朝は、はじまる。凜とした空気、包丁とまな板の音、味噌汁の匂い。朝食の支度が行われていく。入居者一人ひとりの名前とご飯の量・種類を確認し、的確に配膳するのは新郷村連合婦人会の人たちだ。ここでは、長芋、椎茸、とうもろこしといった新鮮な食材を地元の農家から仕入れ、地元の人が味付けをし、地元の味をメニューとしている。時には、入居者が自分の娘の世代に近い婦人会の人に味付けをアドバイスしたりもする。残食が減っているのは、このおかげだ。入居者がたえず笑顔でいられるのも、この地元の食材、地元の人たちが作る味が生んだといっても過言ではない。さらに婦人会



の人たちを厨房職員として雇うことにより、地元の雇用問題にも貢献している。一人の入居者男性がこう言った。「幼い頃から慣れ親しんでいる家庭の味が食べられるほどの幸せはない。派手なイベントをやって村おこしをすることだけが地域貢献ではない。SGグループの活動がそう語っていた。

その地の、その人と、ともに。



東北医療福祉事業協同組合 青森県八戸市大字河原木字八太郎山10番地 81

SG GROUP

介護老人保健施設しもだ / 介護老人保健施設ハートランド / 介護老人保健施設とわだ / 東北メディカル学院 / シルバーレンタルサービス



三村申吾 Shingo Mimura

昭和31年、青森県上北郡百石町生まれ。出版社勤務を経て、平成4年百石町長選に立候補し当選。当時35歳、全国最年少首長だった。平成12年衆議院議員に当選するも、平成15年には議員の職を投げ打って、青森県知事選に出馬した。現在4期目。

紺野 よく「ゆりかごから墓場まで」と言いますが、お母さんのお腹にいるときから、ちゃんと見守っていらっしゃいます。

県民のいのちを守る 仕組みをつくる

三村 ですから、地域に根ざした保健師さんの存在が重要なんです。現場に足を運んでいいますから、どこが家庭がどういう状況かというのをすべて把握している。保健・医療・福祉それぞれ分野で、保健師さんが軸となります。ですから、私も保健師さんたちに会って、直接話を聞くようにしているんです。

紺野 県内各地に足を運んで？
三村 そうです。我々の仕事は、結局一人ひとりの県民のいのちを守る仕組みをつくること。仕組みをつくるためには、現状がどうかというのを把握しないといけない。平成24年度から市町村を訪問して、各市町村の首長さん、保健師さんたちとの現地懇談会を開催しています。5年間で33市町村をまわりましたが、やはり「寄り添う」というかたちをお互い示せるかどうかですね。県は市町村に寄り添い、市町村は保健師さんに寄り添い、それを通じて、受益者である一人ひとりのいのちに寄り添う。これが「保健・医療・福祉

包摂ケアシステム」の根本だと考えています。いまヘルスプロモーションカーというのを導入したんです。小型のエコーやレントゲンといった医療機器を軽自動車に取り付け、保健師さん、看護師さんなどが乗って、こちらから健康診断に向かいます。で、検査結果をICTで飛ばしてお医者さんにチェックしてもらいます。

紺野 たしかに郡部だと、病院に行くのも大変でしょうからね。
三村 そうなんです。お年寄りが病院に行こうとすると、息子さんとかがお嫁さんに休んでもらわないといけない。だから、我慢して、我慢して、絶対言わ

紺野美沙子

Misako Kono

昭和55年、NHK連続テレビ小説「虹を織る」でヒロインを演じる。その後、女優として活躍するかわら、平成10年には国連開発計画親善大使に任命され、国際協力の分野でも活躍している。平成22年秋から、「紺野美沙子の朗読座」を主宰している。

紺野 一人ひとりの「いのち」に寄り添うというのは、そういうことなんですよ。今日はいいお話をうかがわせていただきました。ありがとうございます。



ないんですよ。で、手遅れになってしまふ。そういうことを阻止したいということで、遠隔地を受け持つ病院に導入しました。そしたら、おばあさんたちが泣いて喜んでくれたんです。「死ぬときしか病院で診てもらえないと思っていただけ、生きていううちに調べてもらえた」と。その報告を聞いたときに、私も思わずもらい泣きしました。